令和６年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 田島小学校 ）　　学校番号　３１

【様式】

目指す学校像	自ら考え進んで行動する「強い子」の育成　　凡事徹底　挑戦・感謝　チーム田島小学校！

重点目標	
	１　教育DXを活用した教育の質の向上 ２　子どもが安心・安全に過ごせる学校づくり ３　子どもの Well-being のための家庭・地域と連携した学校づくりの推進 ４　子どもの学びの質の向上を図る教職員組織づくり

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和７年２月６日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	＜現状＞ ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均をやや下回っている。算数を苦手としている児童は多いわけでないが、得意な児童が少ない。 ○市の学習状況調査において、理科が好きと回答する児童の割合は市平均より高い。 ＜課題＞ ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、特に国語の「読むこと」及び算数の「データの活用」等、「知識・技能」を問われる設問を不得意とする児童が多い。 ○市の学習状況調査によると算数への関心が低く、基礎・基本の定着にも課題が見られる。算数を学習する楽しさや達成感を味わえるようにすることが課題である。	・教育 DX による学びの自律化と個別最適化に向けた授業改善	①全教員によるキャリアステージに応じた公開授業（年２回）を管理職が参観し指導助言を行う。 ②話合いの目的や視点を明確にして児童が互いの考えを共有できるように ICT を活用する。	①学校評価「ICT 活用」（児）の肯定的評価が維持できたか。（R5:92.5%→R6:93%） ②学びの指標「ICT の効果的な活用」設問：低⑦、高 15 の肯定的な評価が向上したか。（R5：71.3%→R6：75%）	①ICT を活用した「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した実践を教職員一人あたり２回以上行った。学校評価「ICT 活用」（児）の肯定的評価は 95%と上昇した。 ②「ICT の効果的な活用」全般は肯定的な評価が 75%であったが、協働する場面での活用についての該当設問においては 71.3%と昨年同様の結果であった。	A	・市研究委嘱２年目として、「個別最適な学び」と「協働的な学びの一体的な充実」について、「教えるから学ぶへの変革」を図り、よりよい実践を積み重ねていく。	・参観時には、様々な授業でタブレットを活用しながら、子どもたちが教え合ったり支え合ったりと楽しそうに学んでいる姿が見られ、大変素晴らしい。教員と子どもたちとの関係のよさもうかがえた。 ・教科担任制により、複数の教員が児童に関われることは、子どもたちの安心感につながってよい。 ・学校で子どもたちが読書する姿を家庭にどう発信していくか、保護者を巻き込んでいくことが重要である。
		・子どもが自ら考え、学ぶ楽しさを実感できる授業スタイルの確立	①全学年において一部教科担任制を導入した「田島スタイル」を実施し、学びの質の向上を実現する。 ②市教委による学力向上カウンセリング学校訪問等を活用し、授業改善を行う。 ③考える力を育成する日常的な読書活動を推進する。	①全学年において、一部教科担任制による授業を実施できたか。 ②学校評価「授業の楽しさ」（児）、「学力向上」（教）の肯定的評価が向上したか。（R5：82.5%（児）,85%（教）→R6:85%（児）,87.5%） ③学校図書館１人あたりの年間貸出冊数が向上したか。（R5:34.7 冊→R6:36 冊）	①高学年の教科担任制に加え、低・中学年でも一部教科担任制を実施し、教師が教材研究を深めたり、児童に学ぶ楽しさを味わわせることにつなげたりした。 ②調査結果の分析結果や学力向上カウンセリング研修を踏まえ、授業改善の手立てを立てた。学校評価アンケートの「授業の楽しさ」（児）の肯定的評価 85%と上昇したが、「学力向上」（教）は 80%と下降した。 ③学校図書館開館日を増やしたことや「読書の星」の取組により、学校図書館１人あたりの年間貸出冊数は 40.6 冊ペースと増加した。（12 月末現在）	A	・一定の効果が見られる「田島スタイル」による教科担任制を低・中学年において推進し、授業の質の向上を一層図っていく。 ・学力向上カウンセリング学校訪問が１月であったため、早い時期に実施することで実態に応じた授業改善と児童の学力向上へつなげる。 ・学校図書館部と連携し、日常的な読書活動をより多くの児童に広げる。	
2	＜現状＞ ○全国学力・学習状況調査において、「学校に行くのが楽しい」、「いじめはどんな理由があってもいけない」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、どちらも全国・県平均を上回った。 ＜課題＞ ○不登校傾向の児童が増加している。専門機関等への連携に加え、校内教育支援センター（Sola るーむ）の運用について、支援方針を明確にし、共通理解を図る必要がある。 ○心と生活のアンケート結果等によると、自己肯定感の低い児童が多い。個別の課題を抱える児童を把握し、相談・支援を行っている。	・児童理解を基盤とした組織的な校内支援体制の充実	①月１回の学校委員会（生徒指導・教育相談・特別支援教育、Sola るーむ支援会議）を開催し、ICT を活用した配慮を要する児童の継続的な状況把握と組織的な対応を行う。 ②児童アンケート、日常の行動観察等からいじめや問題行動の早期発見や迅速かつ組織的な対応を行うとともに、スクールロイヤーによるいじめ防止授業を行う。 ③Sola るーむの支援方針や具体的な取組を定める。	①情報端末を活用した学校委員会の開催及びアンケート結果や行動観察に応じた迅速・組織的な対応をしたか。必要に応じてケース会議の開催や専門機関等との連携による支援を実施したか。 ②学校評価「いじめ防止」(保)の肯定的評価が向上したか。（R5:75％→R6:77.5%） ③Sola るーむ支援方針の 1 学期中の立案をしたか。	①情報端末の活用により、効率化を図りながら、生活目標についての取組状況、児童の様子などの実態を振り返り、課題解決に向けて方策を協議した。必要に応じケース会議を開催し、組織的対応を図った。 ②学校評価におけるいじめ防止に関わる肯定的な保護者回答は前年度同様の 75%にとどまった。 ③Sola るーむ支援方針を５月末までに決定し、それに基づいた運用を開始できた。	A	・学校・家庭・関係機関との連携を図りながら、児童一人ひとりへのきめ細やかな対応に努めている。依然として不登校傾向の児童が多いため、温かい学級づくりや保護者との連携などの未然防止に取り組んでいく。 ・年度当初より利用者が減少傾向にある Sola るーむの持続的な運用について検討を重ねていく。	・学校が限られた条件のなかで工夫して Sola るーむの運営を行っていることがよく分かった。今後、Sola るーむの利用者が増えていくと、対応が難しい面があるだろう。ボランティアの確保や研修などが課題である。 ・不登校傾向の子どもたちが「学びの多様化学校」とＳｏｌａるーむをどのように選択していくのか注視したい。
		・安心・安全に生活するための主体的な児童の育成	①児童会を中心とした週１回のあいさつ運動、異学年交流による年７回のふれあい活動、所属感と自己有用感を高める委員会活動や係活動を実施する。 ②健康や安全に関する健康委員会や給食委員会による児童が主体となるキャンペーン活動を実施する。	①学校評価「あいさつ」（児）と「仲良く生活・規範意識」（児）の肯定的評価が維持できたか。（あいさつ R5:87.5%→R6:90%、仲良く R5:90%→R6:90%） ②学校評価「健康教育」（保）の肯定的評価が向上したか。（R5:77.5％→R6:80%）	①学校評価におけるあいさつや規範意識に関する肯定的な回答割合はそれぞれ 87.5%、90%であり、おおよそ維持できた。 ②健康委員会や給食委員会においても新たなキャンペーンを行ったが、学校評価における「健康教育」（保）の肯定的評価は、77.5%と前年度同様であった。学校評価実施後の取組が多かった点を考慮したい。	B	・あいさつについては、季節やあいさつ運動日などにより実施状況がかなり異なるため、年間を通して重点的に指導を重ねていく。 ・児童の委員会活動における各種取組についての保護者・地域への広報を工夫していく必要がある。	
3	＜現状＞ ○学校運営協議会において目指す児童の姿について熟議を重ね、自ら考え進んで行動する児童の育成や開校 50 周年記念事業に向け、保護者・地域との一層の連携が必要であることを共有した。 ○学校ホームページや SNS を活用し、教育活動の様子や学校からのお知らせ等による情報発信を増やしてきた。 ＜課題＞ ○学校運営協議会の更なる周知及び熟議内容を精選し、学校教育活動の充実を図る必要がある。 ○地域人材（各種ボランティア）の高齢化に伴う減少傾向がみられる。	・学校運営協議会や 50 周年記念事業運営委員会との連携	①学校運営協議会において、実態を踏まえた具体的な方策を考え、学校・家庭・地域が協働して取り組む。 ②学校行事や研究授業などを学校に関わる地域の方々に公開し、学校の教育活動への関心を高める。 ③地域人材（各種ボランティア）の確保に向け、学校だよりや回覧板などで募集する。	①年３回の学校運営協議会を確実に実施し、各立場から取り組むことができる改善策を熟議し、実施することができたか。 ②家庭・地域と連携をし、開校 50 周年記念誌発行や式典の実施ができたか。 ③学校行事や研究授業などを学校に関わる地域の方々に公開したか。（年４回以上）	①学校運営協議会では Sola るーむ運営上の課題や本校の研究の方向性について熟議を行い、現状と課題について共通認識をもった。 ②PTA や地域と連携して準備や運営に当たり、子どもたちや来場の心に残る記念式典や各種関連行事が開催できた。 ③学校行事や研究授業など学校運営協議会委員を中心に４回公開した。	A	・第２回学校運営委員会実施時期については、協議内容を鑑みて２学期後半の開催とする。 ・授業公開日を含め、地域の方々に公開をするともに、引き続き各種ボランティア募集を呼び掛けていく。	・５０周年記念式典は、日頃からの学校、家庭、地域の連携の積み重ねがなければ成功しなかった。子どもたちが主役となっていてとてもよい式典であった。 ・子どもたちが学校に関わる地域の人の顔が思い浮かべられるなど子どもたちと地域の方との距離が近いよさを感じる。
		・目指す児童の姿を地域全体で共有するために ICT を活用した教育活動の公開	①学校だよりや学校ホームページを活用し、学校運営協議会の取組等を保護者、地域に広く発信する。 ②学校行事等の学校 HP への掲載や YouTube 配信を行い、子どもの活動や成長の様子を公開し、学校の教育活動や児童の成長への関心を高める。	①学校評価「家庭・地域との連携」（保）で肯定的評価が向上したか。（R5:75%→R6:77.5%） ②学校行事や教育活動の様子を、学校 HP「児童の活動」や限定 YouTube 等を活用して発信したか。（月５回以上）	①学校評価「家庭・地域との連携」（保）の肯定的な回答割合は 75%と昨年度と同様であった。 ②児童の様子を 35 回 HP 掲載するとともに、学校行事等の限定 YouTube 配信を 19 本実施し、学校教育の様子を家庭・地域に発信した。（月平均 6.7 回）	A	・年度途中に移行したスクリレは利便性が高いが保護者しか見られないため、ブログ機能を活用した「児童の様子」について一層発信していき、地域に開かれた学校づくりを計画的に進める必要がある。	
4	＜現状＞ ○児童のタブレット活用状況は、市の平均を大きく上回り、積極的に情報端末を活用した授業が実施されている。 ○市教委委嘱「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実の研究指定の校内研修の１年次である。 ＜課題＞ ○基本的な研修理論の共通認識をもつ必要がある。 ○業務に関して負担感や多忙感を感じている教職員は市平均より下回っており、学校業務改善の取組の肯定的回答は市平均を上回っているが、時間外在校時間に個人差が見られる。	・個別最適な学びと協働的な学びの充実を実現する校内研修の実施	①研修主任を核とした「個別最適な学び」と「協働的な学び」についての組織的な学校研修を実施する。 ②キャリア Navi を踏まえた当初面談や埼玉大学と連携（文科省委託事業検証校）した研修奨励の実施。	①指導者を招聘した年２回の研究授業及び自分事として研修に取り組むためのブロックや全体での指導案検討や一人年２回の公開授業を実施したか。 ②埼玉大学と連携した「研修履歴表」（OPP シート）を活用し、受講奨励に対し各教員が自己評価を行うことができたか。	①市教委より指導者を招聘しての講演や２回の授業研究会を核として、研究テーマについて共通理解を図ったり、児童主体の学習活動への転換を図る実践を一人年２回行ったりした。 ②当初面談に加え、埼玉大学と連携した「研修履歴表」を活用した振り返りや受講奨励に係る研修を２回行ったことで、各教職員が研修による変容や今後身に付けたい資質能力についてメタ認知することができた。	A	・今年度の研修成果に加え、リーディングＤＸに係る先行研究を生かしながら、子どもに学びを委ねる実践を積み重ねていく。 ・年間を通して、全教職員で業務改善の視点をもった方策を考えられるような工夫を図る。	・ICT を活用した協働的な学びについては、１～６年生までの各発達段階に応じて実践を重ねてほしい。低学年では、基礎・基本をしっかりと身に付けたうえで、ICT を活用してほしい。 ・ICT だけでなく、教科書を用いて、落ち着いて学習を進めるよさも大切にしてほしい。
		・一人ひとりが働きやすく、働きがいのある職場づくり	①校務用端末を効果的に活用し、教職員一人ひとりが授業準備等に取り組む時間を確保するために、業務改善の目標を定め実践する。 ②教育環境や教育活動の見直し。	①学校評価「ICT 活用」（教）の肯定的評価が維持できたか。（R5:92.5%→R6:95%） ②さいたま市教員等の勤務に関する意識調査「学校業務改善の取組」の肯定的評価を維持したか。（R5:35%→R6:36%）	①学校評価「ICT 活用」（教）の肯定的評価は 90%と微減した。 ②勤務開始時間、個人面談時期の特別日課、体育的行事の精選などを行った。さいたま市教員等の勤務に関する意識調査「学校業務改善の取組」の肯定的評価は 32.4%と微減した。			